
ペンケイの漢修行

ひろにか@そらかけ同人誌制作中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベンケイの漢修行

【Nコード】

N5824P

【作者名】

ひろにか@そらかけ同人誌制作中

【あらすじ】

獅子堂家にやってきたベンケイ（頭脳体）は、つつじを見返すために高嶺に弟子入りを志願する。それにOKが出された結果、獅子堂家では奇妙な修行が始まるのだった。

（前書き）

獅子堂姉妹とベンケイのひたすら馬鹿馬鹿しい話です。ちょっとセクハラ的な展開はありますが、お約束すぎてエロくないのでご期待なさらず（笑）。詳しく考えてはないのですが、多分、本編終了後。

「たのもお！」

どろどろどろどろどろ！

「んもー・・・こんな朝早くに誰？ 非常識な人だなあ・・・」

とある日の早朝、獅子堂家に響いた大声＋戸を叩く音。
他の皆は忙しく、暇な三女が寝ぼけ眼で玄關に向かう。
扉を開くと、そこにいたのは。

「べ、ベンケイ・・・！？」

人ではなく、コロニーのブレインだった。

「ワタシは漢を磨きたいのだ！ こちらの高嶺殿に弟子入りしたい
！」
「はいい？」

こうして、騒がしい一日が始まった。

ベンケイの漢修行

「まあいいんじゃない。ブレインコロニーの動向は、知っておけるならその方がいいわ」

「か、風音おねえちゃん・・・」

玄関で土下座（本人はそのつもりらしい。骨格も何も有ったものではないのでいまいちわからないが）を続けたまま動かないベンケイに対処法が分からず、とりあえず姉達を呼んできた秋葉。

しかし、長女は予想外に寛容だった。

弱った三女が、次女の顔を見る。

「でも、高嶺おねえちゃんイヤだよね？　そもそも、漢を磨くのに女の人に頼むってどうなのよ？」

「そ、それは仕方なかるう。ワタシを見ても驚かず、なおかつ弟子にしてくれそうな人間など他にいないではないか！」

「それは・・・そうかもしれないけど・・・」

かといって、ようやく落ち着いた我が家に来られても困るのだが、それに、ここにはレオパルドがいる。何か騒動が起こりかねない。でもまあ、本人が断ってくれるだろうし・・・とか思っていた秋葉の思惑はあっさり崩れる。

「・・・いいでしょう」

「あれえ?!」

ご本人、あっさりOKサインを出された。

「外装を外し丸腰で来るとは、なかなかの覚悟。姉さんもああ言っていることです。来る者は拒みません」

「おお有り難い！ 拙僧、この御恩は忘れません！」

僧なのは名前だけでは？ 宗派も何もないだろう。

いろいろ言いたい秋葉だが、早くも入りにくい空気が出来上がっていた。

「見ていろつつじ！ ワタシは漢を上げてみせる！ 『アンタみたいな鉄の塊に触られても何とも思わない』 などとは、もう言わせんぞお！」

「ええ。極めるのです、武の道を！」

「なんか、のっけからあっちこっちが食い違ってる気がするんですけど・・・」

「そんな常識的なツツコミが、通用するわけじゃない・・・」

不在のイモちゃん（朝は何かと忙しいのだ）に変わり秋葉のフォロ―をしたのは、意外なことに四女だった。

同情・・・いや、諦めがその瞳には宿っている。

それを見て、「ああこの子もオトナになったんだなあ・・・」と
心の中でつぶやく秋葉も、既に何かを諦めていた。

いいのだろうか、この家。

* * *

素振り千回。腕立て伏せ千回。スクワットも千回。
そうこうしているうちに、もう夕方だ。

「筋肉が付くわけでもないのに、何やってるんだろ・・・？」

ここは獅子堂家の稽古場。

まあ見た目は、普通の剣道場のようなものだ。家にそんな場所が
あることが普通では考えられないのだが。

それはともかく、言われることを真面目にこなしているベンケイ
に、様子を見に来た秋葉がこぼす。

だが、返事には微塵も迷いはない。

「構わん、ワタシは漢を磨いているのだ！」

「ご本人が納得しているのであれば、いいんじゃないでしょうか・・・」

イモちゃんもイマイチ釈然としていないようだが、そう言った。

「ベンベン、ふぁいとぉ」

桜は、全面的に応援の方向らしい。

「基礎は終わったようですね。では、試合といきましょっか」
「よろしくお願いします、先生！」

休む間もなく、高嶺から次の課題が言い渡される。
まあ彼らの場合、人間と同じように疲労するものでもないのだろ
う。

「どこからでも、かかってきなさい」
「はい！」

竹刀（人間用のごく普通のもの）を構えるにしろししたコロ
ニーのブレイン。

それに対峙するのは、胴着姿の美女。

「うわ、なんかシユール・・・」
「B級怪獣映画のワンシーンみたいです・・・」
「たかねおねーたん、Bカップっ？」

そんな話はしていない。
好き勝手言ってる外野はさておき、

「たあっ！」

「うおりゃあ！」

当人達は大真面目で打ち合っていた。

「踏み込みが甘い！ あと、肩に余計な力が入りすぎよ！」
「オス！」

「・・・その返事は、競技が違うんじゃないかなあ・・・」
「あの体型で肩っていうのも、どこなんでしょうね・・・」
「かたかた、こりこり〜？」

更に言えば、彼は地面から浮いているので踏み込みと言われても、
こんな感じで、見ている側はツツコミに専念している。

「でもやつぱり、おねえちゃん強いよね〜」

「ええ。圧倒的です」

「ベンベンー、負けるな〜！」

試合の内容については、特に語ることがないからだ。

素人ではあるのだが、その目から見ても高嶺がベンケイを上回っているのは明らかだった。

本人も、それはわかっていたようで・・・

「ワタシは、負けるわけにはいかんのだあああ!!」

一か八か、捨て身で撃ちかかるベンケイ。
だがしかし。

「・・・うおっ!？」

指導を参考に、地に足を付け思い切り踏み込んだのだが、濡れていた床でバランスを崩す。
そして、竹刀の先は。

むに。

高嶺の胸元に、一直線だった。

まあ、勢いは削がれていたので怪我はないだろうが・・・

「お・・・お約束・・・」
「ベタベタですね・・・」

観客席（あくまで名前だけ。単に入り口の辺り）からの確なコメントが入る。

「すみません、先生！ もう一度・・・・・・・・・・へ？」

その辺りのことを全く気にせず続きを頼もうとしたベンケイは、師から立ち上る怒気によりやく気付く。

「うりゃあああああつ！！」

「ぎゃあああああつ！？」

裂帛の気合とともに放たれた一撃に、哀れなブレインは稽古場の壁を突き破って飛んでいく。

「・・・おねえちゃん、本気だ・・・」

「QT使ってましたね・・・」

そんな呟きは、朦朧としていたベンケイには届かない。どうにか聞こえたのは、高嶺の鋭い声だけだった。

「あなたのような破廉恥な輩は今日限り破門です！」

「ああつ、高嶺さま！」

足早に去っていく彼女を、イモちゃんが追っていく。残された秋葉は、ベンケイに駆け寄った。

「えーっと、大丈夫？　．．．わざとじゃないんだしき、高嶺おねえちゃんも謝ればきつと許してくれるよ．．．」

あれだけ頑張っていたのだ。慰めの言葉をかけてみたのだが．．．

「．．．．．やったぞ．．．．．」

「え？」

「そういうことか．．．。金属がダメなら、竹刀を使えばいいと、そういうことなのだな！」

「な、何の話．．．？」

「世話になったな獅子堂家！　だが、次に合う時は敵同士だ！！」

「ちょ、ちよつと！？」

何だか満足したようで、ベンケイは振り返る事無く去っていった。取り残されたのは、三女と五女。秋葉の口から、投げやりな言葉が零れ落ちる。

「そういえば、なんで床濡れてたんだろ．．．．」

「ベンベン、桜のオイルでピカピカ」

「ああ、桜の差し入れだったのね．．．。でもそういうの、撒くんじゃなく手渡すものじゃないかな．．．．」

まあ、飲むわけでもないだろうが。

そんな感じで立ちつくす姉と妹を、壁の穴越しに眺める通りすがりの四女さん。

ここは何か、~~レ~~の一言が欲しいところである。

「今日も平和ねー．．．．」

．．．．．ありがとうございます。

* * * * *

そして。

「見よつつじ、ワタシは奥義を体得したのだ！」

「はあ？ アナタ、今日一日いなかったと思えば、何をテンションあげているわけ？」

「ええい黙れ！ 受けるがいい、我が必殺の一撃を！！」

つつんむにむに。

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．で？」

世にも冷たい視線を向けられ、ベンケイはたじろぐ。

「ばっ、馬鹿な・・・！ 獅子堂高嶺には確かに効いていたはずなのに・・・！？」

「甘いわね、ベンケイ！ このワタシをあんなお色気キャラと一緒にしないで頂戴！」

「お色気キャラ・・・？ あの大和撫子が・・・？」

「大和撫子は武器を持って戦ったりしないわ」

「はっ、確かに！」

付け加えると、素手で戦うこともないと思う。

「だがつつじ、何故そんなことを知っている？ オマエと彼女は、接点が無いはずだが・・・」

「ドラマCD（vol.1）からの情報よ」

「メタなことを?!」

全くである。

「まあもつとも、ワタシは持っていないのだけどね」

「何い？」

「何故自分の出番が無いものを、わざわざ買わなくてはいけないのかしら？」

「ではどうして、内容を知っているのだ・・・？」

「決まっているわ。天の声よ！」

「オマエの言ってることは全くワカラナイ！」

（後書き）

しんどそうなツツコミ役を秋葉に任せたら、何かナミが悟りました（笑）。台詞は少ないですが、オイシイ役回りをあげられて満足です。・・・我ながら、変な甘やかし方だ（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5824p/>

ベンケイの漢修行

2010年12月31日05時46分発行